

## 副詞の指導法

著者	石神 照雄
出版者	長野県ことばの会
引用	ことばの研究 2: 1-8 (1983)
発行年月日	1983-04-17
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10091/00022352">http://hdl.handle.net/10091/00022352</a>

# 副詞の指導法

## 一 文の二面性

文章は文の集合としてある。これは言うまでもないことであるが、文章の読解ということを考えるためには文章を構成する文というものがどのようなものであるかということをも十分に理解しておく必要がある。

文とは何か、という問いかけに対しては実に多くの研究が行われているのであるが、ここでは意味の面からの

思想が言語によってあらはされたものを文といふ（『日本口語法講義』）

という山田孝雄の規定をとりあげることとする。即ち、文に盛り込まれる内容を思想とするならば、それは、何かあるコトを対象とするオモイということであり、客体面と主体面との統一として把握されることになる。

文には、オモイとコトとが一体化したありかたで表わされる様式のものとして

石 神 照 雄

バラよ。

美しいバラよ。

という、喚びかけの対象を中心とした喚体式のものもあるが、文の一般的な姿としては

バラが咲く。

バラが赤い。

という、主語―述語相関による述体式である。ここでは、△バラが咲く▽コトもしくは△バラが赤い▽コトを、そうであるとするオモイ（いわゆる断定）は、コトを実体と属性とに分析し、これを主語―述語相関として捉え表わすという構文様式として表わされているのである。

右は最も単純な姿での分析であるが、このように文には、コトの面とオモイの面とが統一されている。従って、文章を読み進むにあたっては、文が表わしている客体的な面の理解だけでなく、そこに示される主体的な面がどのようなものであるかということも正確に読みとらなければならないのである。

## 二 コトの拡大と副詞

述体の文を基本として、そこに於ける意味の拡大というのをいうのが連用修飾という構文関係である。連用修飾は広義には

りんごを食べる。

花子に本を与える。

などの、名詞に格助詞が添加したありかたをとる所謂格関係によるものも含むのであるが、狭くは

バラが赤く咲く。

雨がしとしと降る。

といった連用形もしくは副詞によるものをさしているのである。

格関係によるものは、述語動詞の性質によってあらかじめ決められた関係の項目を補うことによって、意味の明示化を行うものである。例えば、「食べる」という動詞であれば「―ヲ」として表わされるものを補うのであり、「与える」という動詞の場合に「―ニ」として表わされるものを「食べる」はとることが出来ない。このように述語動詞によって決められた関係の中でコトの面の意味の拡大を行う関係を補充関係という。

一方、狭義の連用修飾もコトの面の意味の拡大を行なうものであるが、ここでは属性が二重に分析されて表現されるのである。先の「バラが赤く咲く。」を例にとって考えてみよう。ここではまずコトが述体方式で分析され、「バラが咲く」と把握されたのである。つ

まり、時間的な属性把握として動詞「咲く」が得られた。それに対して、超時間的な面での属性把握が行なわれ、形容詞「赤い」を得るのである。同一のコトに対して、二重に属性把握が行われているのである。「雨がしとしと降る。」の場合も同様に考えることが出来る。ということは、副詞と呼ぶものの多くは、このような狭義の連用修飾の構文関係（これを修飾関係という）を構成するところから、その内容に於いて形容詞に相当するものと考えてよいことになる。述語に係りその意味を詳しくするという連用修飾の機能を持つことによって、副詞は、コトの面の拡大を行なうものと考えられるのである。

ところが、例えば、

太郎マダ中は学生だ。

という文に於いて、「マダ」を「中学生だ」に係るとするだけでは、この文の意味を読みとることは出来ない。一文の意味の十全な理解が妨げられていては、殊にそれが文章に於ける中心的なものである場合、読解ということは困難になる。教科書の例文を基に具体的な分析を行なうこととしよう。

## 三 オモイの拡大と副詞

あれは四月十日、三時間のことだった。

一学期の学級委員選挙が始まろうとしていた。先生が投票用紙を

配られた。しかし、ぼくは、ゆうべから迷っていたことが解けないでいた。「四年のときは、三学期の学級委員だったのに、こんど」票もはいらなかったらどうしよう。」

ぼくは、やりきれない気もちでいっぱいだった。あたりを見まわすと、みんなは、何事もないように、どんぐ書い て出しにいく。

「みんなが早く出すからといって、つられるな。問題は、じぶんに投票するか、前川君に投票するかだ。」

ぼくは、じぶんの心に、強く言い聞かせた。だが、どちらの名も書くことができない。

「ぼくに投票しよう。……いや、そんなみつともないことはできない。……前川君に投票しよう。それが当然だ。……だが、ぼくに一票もなかったら、……それこそみんなのわらいものになる……。」

「ぼく」……「前川」……「ぼく」……「前川」と回りながら、二つの心がたたかいていた。すると、そのとき、ある人物の名が、ぱつと頭にうかんだ。

「九郎助！」

ぼくは、はっとした。

「九郎助……。今のぼくは、このあいだ図書室で読んだ『入れふだ』の九郎助と同じだ。あの九郎助は、じぶんの名を書いて入れた。……だが、ぼくは、まだ九郎助ではない。まだ、じぶんの名を書いている。」

ぼくは、じぶんの心と、はげしくたたかった。もしも、今、じぶ

んの名を書いたら、九郎助のように、あとあとまでも、心の中に暗いかげが残るにちがいない。それに、じぶんの名を書いているということがわかったら……。たとえわからなくても、あたりを見まわして、おそろのおそろ書かなければならない。

「よし、前川君に投票しよう。……だが、やっぱり、ぼくに一票もなかったら、……。ばか、まだそんなことを言っているのか。おまえは、九郎助になりたいのか。あとあとまで、暗い思いをしたいのか。」

こんどこそ、ぼくの意志は、はっきりと決まった。ぼくの心は、やっと平静になった。

ぼくは自信をもって「前川」と書き、投票した。そのときの気もちは、さっぱりとしていた。

（「学級委員の選挙」小学校国語五年下 学校図書株式会社 昭和四十八年発行 傍線は引用者）

引用をしたのは文章の中心的な箇所である。この単元は、題目の次に「主題のはっきりした文章を書け」ということばに続いて、次のような文章が掲げられている。

わたしたちの周囲には、小さなできごとがよくおこります。そういうできごと、あらためて見直したり、別のことと結びつけたりしてみると、深く考えさせられる問題がひそんでいるものです。

なぜ、あんなことがおこったのだろうか。

だれその考えかたや態度は正しかったろうか。

そのとき、じぶんはどうだったろうか。

このように、一つのことをみつめ、それについての考えを文章に書き表わすことは、わたしたちの考える力を高めるうえに、たいへん役立ちます。

次の文章は、複雑な心の動きをはっきりとらえて書いたものです。(同右)

さて、本文は、主人公の心の複雑な動きが図書室で読んだ『入れふだ』の中の人物「九郎助」を引いて語られる。この「九郎助」と主人公とを重ね合わせて語られる部分を十分に読み解くことが、全体の理解にとって重要なものとなっている。

本文中には、「まだ」をもつ文が三つある。その意味を変えることなく整理して次の三つとする。

- (1) ぼくは、まだ九郎助ではない。
- (2) ぼくは、まだじぶんの名を書いてはいない。
- (3) おまえは、まだそんなことを言っているのか。

ここで、(2)と(3)とは、述語用言に係りその意味を詳しくするという連用修飾語としての副詞に適うものである。これらは用言を含む「書いてはいない」「言っている」という部分との関係を見ることが出来る。

これに対して(1)は、「九郎助でない」との関係を見なければならぬ。ここでは否定文としてのものであるが、肯定形式とした

- (4) ぼくは、まだ九郎助だ。

というものも文として成り立つ。ここには述語に用言をとってはいないにもかかわらず、副詞「まだ」が入って正しい文としてある。副詞のありかたとしては、一見例外的であるにもかかわらず、「まだ」を持つ(1)にあたる文を本文中で読み解くことは、この単元全体の意図するところを理解する上で極めて重要と考える。

さて、本文中では、(1)に続いて(2)が示される。(1)の意味としては、(2)で表わされることと同じとも言えるのであるが、(1)をそれとして把握することは、主人公の心の動きを知ることになるに於いて(2)に解消することはできないのである。

まず、(1)の「まだ」が表わしているものであるが、これは先に示した副詞「しとしと」のように客体的な面の分析によって加えられたものでないことが知られる。例えば(4)で、「まだ」のあるなしにかかわらず、ここでは「ぼく」が九郎助であるVコトが表わされているのである。とすれば、「まだ」によって加えられているものは、主體的な面であるといえよう。

さて、主人公の「ぼく」自体が「九郎助」でないということは事態としては当然のことである。にもかかわらず、それを「九郎助」と把握するに至るプロセスが心の動きとして存在する。主人公「ぼく」は、迷いの中で自分の名前を書くVコトを頭の中で思い浮べ

ている。それは「九郎助」の行為であり、そうすることは「九郎助」ということである。現実の立場で現実の「ぼく」自身を見つめると、「ぼく」は、頭の中に思い浮べたところに至ってはいないことを知る。この現実と予想との関係を捉えたものが「まだ」である。従って、「ぼく」は、ここでは自分のつくりあげた予想に対して現実との関係から判断を下しているのである。思い浮べた自分の名前を書く√コトはどうし、ていない現実からは打消すべきものであり、△ぼくが九郎助である√コトは、「九郎助」的行為をしていない「ぼく」にとって、そうではないとして打消すべきものなのである。ここで重要なことは、「ぼく」というものを、主人公は、時の流れに従って非「九郎助」的段階・「九郎助」的段階というようにイメージしているということである。先の(4)が本文の中で成り立つとするならば、主人公の「ぼく」は、「前川」としてではなく、自分の名前を投票用紙に書いて、その書いた段階で迷いの中にあるという状況を見ることが出来る。つまり、「九郎助」的段階に入ってしまった、そこから次の段階へ抜けだそうとしている(その段階を、脱「九郎助」的段階と仮称する)という迷いを読みとることが出来るのである。

以上の検討で明らかのように、副詞「まだ」は、発言者が頭の中に持っている像との関係で、とりあげたコトがどのようなものであるかを示すものである。それは、文に於ける客体的な面の表現ではなく、主体的な面の表現である。本文中では、(1)に続いて(2)があるために

心の動きはどのようなものであるか確定しているが、(2)にあたるものがな  
いとして、(1)にかわって、

(5) ぼくは、もう九郎助だ。

(6) ぼくは、もう九郎助ではない。

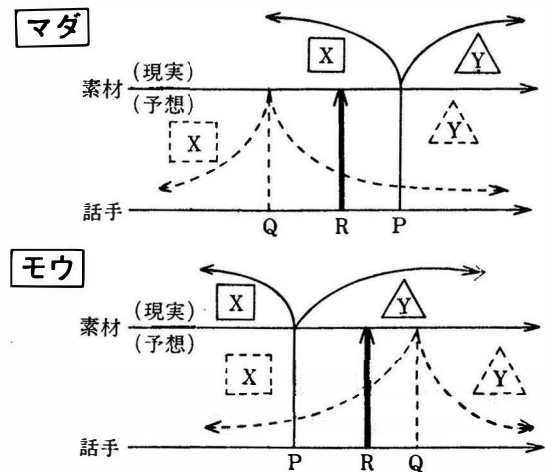
というものがあつた場合、各々の文をそのオモイの面がどのようなものであるかを正確に読みとることは、文章を読み進む上でのポイントとなる。

(5)では、主人公は自分の名前を書いたことになる。つまり「九郎助」的段階である。自分の名前を書いていない自分即ち、非「九郎助」的段階を思い浮べ、それとの関係で自分の今を表わしているのである。残念だというよりも、さらには自棄的なニュアンスを読みとることになる。

(6)では、一旦は主人公は自分の名前を投票用紙に書き入れた。ところが、思い直してそれを消した段階、脱「九郎助」的段階にある。一旦は自分の名前を書いた「九郎助」的段階を思い浮べ、それとの関係で今を表わしているのである。未来に対する希望といったニュアンスを読みとることが出来る。

このように考えて来るならば、「まだ」という副詞と「もう」という副詞とは、一対となつて、文の発言者がどのようなオモイを抱いているかということを構文上に表わすものだといえるのである。

「まだ」「もう」が表わす内容を図を以て示すならば次のようになる。



P：現実におけるXからYへの変化時  
 Q：予想におけるXからYへの変化時  
 R：現実の立場時（発言者が素材を捉える時）

#### 四 おわりに

ここでとりあげた「まだ」「もう」は副詞の分類で言えば、先に示した「しとしと」と同じ情態副詞のものである。しかしながら、情態副詞といわれるものの多くが修飾関係を構成する修飾語として、コトの属性面を切り取り表わしたものであるのに対し、「まだ」「もう」が、発言者のオモイを表わすものとして、予想と現実との関係を捉えたものであるということを正しく理解しなければならない。

副詞というと直ちに連用修飾の機能がとりあげられ、述語に係るとされるのであるが、その語がどのような内容を有して係るという

関係を構成するのかを明らかにすることが重要である。読解という作業の中では、文法的な機能関係ではなく、具体的な意味がどのようなかを明らかにしなければならない。

例えば、程度副詞を有する文で

- (7) 太郎はとても金持ちだ。  
 (8) 次郎はわりと金持ちだ。

という二つの文があった場合、常識的には(7)の方が程度大として、太郎の方が次郎より金持ちというように考える。しかしながら、(8)が各々異なる発言者によるものであった場合、実際には次郎の方が大金を持っているといったことも起り得る。程度副詞で示されるところのものを、実体化して、とてもなるもの、わりとなるもの、というように用いるのであるが、程度副詞で表わしているところのものは、何らかのコトとの間での相対的な関係としてのものであって、比べる基盤が異なる場合には、右のようなことも起ることとなる。副詞が表わすところのものがどのようなものであるかということは、読解の中で具体化することによって明らかにしなければならないのである。

本稿は、副詞の指導にあたって、文におけるオモイの面がどのように表わされるかという問題を「まだ」を例に考えてみた。副詞といわれるものには、ここにとりあげた外に陳述副詞がある。陳述副詞は文の述べ方を規定するものとして、述部との呼応関係についての指導は積極的に行なわれているようである。しかしながら、ここ

にとりあげた「まだ」「もう」などに関しては、形態上の呼応関係も明らかでないところから、余り論じられることはなかったようである。日本語として全体的な意味が理解されることから、係り、受けといった機能関係を云々することで文の構造が把握できたと思ひ込んでしまいがちであるが、具体的にはどのような意味なのかということ明らかにし、そこにはどのような関係が捉えられるのかといったことを明らかにしなければ、真に文の構造を理解し、文章全体を正しく理解するということは至らないのである。副詞の指導としては、具体的な意味から、その語が構文上に位置することについて表示される抽象的な関係としての意味を把握することを目ざしたものが必要である。その具体的な方途については機会を改め論じたい。

一九八一年十月十一日稿

(信州大学助教授)